

## 『論註』『名義撰対』の論理とその背景

田中 無量

僧肇(三八四―四一四?)を媒介にして龍樹の中觀思想を学び、「四論仏性」を研鑽した北魏の曇鸞(四七六―五四二頃)は、『浄土論』を注釈した『往生論註』(以下、『論註』)を著している。この『論註』は、曇鸞自らの思想的立場から『浄土論』を解釈したものであり、そこには『浄土論』から『論註』への思想展開を見ることが出来る。その一端として、筆者は、拙稿「『往生論註』にみられる「智」と「慧」の分釈の意図」(『真宗学』一二六号、刊行予定)に、まず『浄土論』と『論註』の「智慧」の説示が異なることを論じた。そしてこの相違に注目することで、従来の研究による「名義撰対」―智慧と方便を語る箇所―の解釈の問題点を指摘し、新たな理解の方法を提示した。更に、その考察によって明らかになる『浄土論』から『論註』への展開は、曇鸞の思想的立場に由来するものであると推測した。当論文は、この曇鸞の「名義撰対」の論理の思想背景を論じるものである。

その方法論についてだが、当発表では、『論註』『名義撰対』の論理を示した上で、その論理と僧肇の二諦論との関係、更に、僧肇を受容し展開する南朝の道生(三五五―四三四)の二諦論との関係を考察した。北朝の僧肇に続いて、南朝の道生の思想を取上げたのは、曇鸞が南朝において仏教を研鑽したことと否定できないことに加え、仏性の研究者でもある道生が、自

らの二諦説に基づき「仏無浄土説」を示していくからである。ゆえに、互いに僧肇思想を受容しつつ、「仏無浄土説」を説く道生と、浄土を説示する曇鸞の思想とはどのような点で相違するかを論じた。なお、僧肇の二諦論については『不真空論』から論考し、道生の二諦論については『涅槃經集解』ならびに『注維摩經』から考察している。紙幅の都合上、発表の結論のみを示したい。

まず、曇鸞の「名義撰対」に示される二諦説は、「方便」において二諦(智慧と方便)を説き、その二諦が相即であること示す。この論理は、僧肇が方便の二諦―僧肇は龍樹という俗諦において真諦と俗諦の二諦を語る―を示し、その二諦が相即であることと共通する。しかし僧肇は、この「方便の二諦」を超克する「第一真諦」(龍樹という真諦)に悟入する論理を形成するが、曇鸞は、般若を説くものの、「第一真諦」に悟入する論理は示さない。「一法句」を示す文中に、僧肇という第一真諦に悟入の論理を語っているであろう。

次に、曇鸞と道生思想の関係について考察した。「名義撰対」の論理は、「第一義諦」(智慧)に摂取される思想ともいえる。この「第一義諦」に摂取されるという点は、道生の一実諦の思想と同様のものであると理解できる。しかしながら曇鸞は、「智慧」という一実諦を示すのではなく、「菩薩の法は智慧と方便に依る」と示し、あくまでも「智慧」と「方便」の二諦を述べていくことから、「唯一無二」「唯第一義有」と説く道生の思想とは異なるものとなる。しかも、道生は自らの一実諦思想に基づいて、仏無浄土説を表わしていくのであるから、まさし

く、道生の一実諦思想では「浄土」(方便)を説き示すことが出来なくなるであろう。ゆえに曇鸞は、『浄土論』所説の「方便」と「般若」の二諦の相関性を、「智慧」(第一義諦)に包摂して語りつつも、僧肇の二諦論―すなわち方便・言説・用における二諦相即論―を受容し、どこまでも「方便」としての二諦論の形態を維持していく。

以上、曇鸞は僧肇を受け二諦相即論を形成しつつも、同じくその影響を受ける道生のように、一実諦思想に陥ることはない。一実諦では方便の説示意趣が希薄となり、仏無浄土説に偏るであろう。曇鸞においては「浄土莊嚴」を示す以上、常に「方便」を示さなければならないのである。これが僧肇から曇鸞への流れである。つまり『論註』の「名義撰対」の論理は、僧肇の二諦論を背景に、『浄土論』を解釈した結果であると考えられる。

## 「往生伝類」における

### 善導・善道間についての一考察

山崎 真純

中国・日本浄土教において善導の伝記は、約三十種にのぼる多数の文献に現れる。その中、王古の『新修往生伝』の中巻には二種の善導伝を並記するという形であったとされる。それは良忠の『観経疏伝通記』巻一に中巻には三十三人の伝記を収め、その第二十五に善導、第二十六に善道を挙げている(『大正蔵』巻五七、四九八c一四―一五)ことから分かる。これに

より、従来善導二人説・一人説というものが取り沙汰されてきたが、私は一人説の立場に立ち、なぜ善導の伝記が二つに分けられるに至ったのかを考察する。

まず『新修往生伝』の善導伝を見てみると、多少の文字の変動がある他、『浄土往生伝』の善導伝にはない記述が、『新修往生伝』では追加されていたり、詳細な説明が加えられている。これは『新修往生伝』において、特殊な例の一つである。『新修往生伝』を概観してみると、『浄土往生伝』と重なるほとんどの伝記は、『新修往生伝』では省略されているのである。にもかかわらず、善導に関する伝記は、『浄土往生伝』より『新修往生伝』にある記述の量が多いのである。

次に『新修往生伝』における善道伝を見てみる。これは全くといっていいほど『浄土往生伝』の善導伝の記述を参照されていない。そのため、両者の比較はできないが、『往生西方浄土瑞応刪伝』にある善導伝の話とは多少相応する所があるので、それを挙げると、①道綽との出遇い、②七日不萎、③道綽三罪である。一々の文字まで同じというわけではないので、『新修往生伝』の善道伝がこれを見て作成したか否かは不明であるが、現存する資料の中において、この『往生西方浄土瑞応刪伝』の善導伝と一番近いのである。しかしその中でもⅠ出身地、Ⅱ明勝法師との師弟関係、Ⅲ慧遠を慕って廬山を訪ねる、Ⅳ疾病による往生などは、この『新修往生伝』の善道伝で初めて現れるのである。

以上、『新修往生伝』における善導・善道の二つの伝記を見たが、その中で最も両者が異なっているのは、往生相であろう。